

編集後記

『ことばの研究』13号(終刊第二号)をお届けする。終刊「第二号」を発刊することになった経緯は、2020年5月に刊行した終刊号(12号)を惜しむ声が多く、その声に応じて、もう一冊刊行することになった、…という「いい話」ではない。しかし、さりとてそう「悪い話」でもない。

この研究誌の活動母体であった「長野県ことばの会」が、しばらく休止状態にあり、終刊に到った経緯は前号の澤木氏の文章に譲るが、終刊号刊行後になって、使い切ったはずの会計収支にまだ残余のあることが判明した。このことを「機」としてどうとらえるか。事務局で意見交換を行い、落ち着いたのが、終刊第二号を発刊することである。結果として、かつて信州の地で学問を語り、その後それぞれの新天地で活躍する同朋を含め、多くの執筆者を得られたこと、これは「いい話」のもちろん一つである。が、他にも「いい話」はある。

本会誌は、1980年に創刊号が刊行されてほぼ40年が経つ。この文章を書いている山田が参加するずっと前から活動歴のある研究会の活動成果の一つである。この13号を以て本誌と本会はその歴史を完全に閉じることとなる。

しかし、昨年2020年から本誌はバックナンバーを含め、オープン・アクセスの電子ジャーナルとしてリポジトリに登録が認められた。これにより、世界中どこからでもインターネットによってフリー・アクセスが可能な状態になった。少部数発行に過ぎず、そのためアクセスも難しかった本誌が、今や多くの方々に読んでいただける、新たなステージに踏み出すことにもなったことを「いい話」として大いに慶びたい。この終刊第二号の発刊は、その「慶びの証し」とご理解いただきたい。

ひとつお願いがある。リポジトリ登録は、信州大学附属図書館の多大な御協力により実現可能となった。リポジトリ登録に当たっては、様々な権利関係についてクリアする必要がある。残念ながら掲載承認を得られなかった方もいらっしゃる由であるが、まだ連絡のつかない方々もおられる。心当たりの方は、是非とも図書館の「長野県ことばの会会誌『ことばの研究』の電子的公開に関するお願い」のページ(URLは下記の通り。検索窓から「長野 ことばの研究 電子的公開」でも)にアクセスいただき、ご承認を表明して頂ければ幸いである。『ことばの研究』の新たなスタートに対して「御慶」と(心の中で)声を出していただきたい。これが本当に最後の最後で「終刊三号」はもうないはずである。

最期に、リポジトリ登録に当たって中心となって対応して下さった図書館情報システム担当の湯本寛深さん他関係者各位と、退職後の身にも関わらず、会前代表として編集の労をとって下さった澤木幹栄・信州大学名誉教授、そして執筆者の方々に謝意を表したい。

(2021年1月。山田記)

<https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/matsumoto/news/2020/11/kotobanokenkyu.html>